

このコーナーでは、この地域に伝わる民話を紹介し、皆さんからの感想画を募集しています。紹介する民話は、子どもたちにも、ふるさとの伝説や昔話を教え、少しでも遠い祖先の心や、郷里の土地のぬくもりを感じてほしいと、松浦市教育委員会が平成4年に再編した「松浦の民話」という本から引用した話です。

昔、日本の武士が争っていたころのことです。

京都には、足利將軍という力の強い武士が、天下を治めていたのですが、力が弱くなると、全国の武士や地方の力のある者たちは、思い思いに自分の土地を広げようとして、あちらこちらで戦を始めました。ゝ

松浦の民話⑥

七頭半のしか

大勢の家来を引き連れて、殿様も勇ましく出発しました。

やがて、殿様たちは、目指す山のふもとまで来ると、一休みしながら、

「さて、今日はどのくらい、獲物があるのかのう。」

と、上機嫌で家来と話しをしておられました。

「そうじゃ、供の中に法師が一人おったのう。その者に占わせてみようぞ。」

そのころ、松浦に志佐城がありました。志佐の力は、福井（今の佐世保市吉井町）の直谷城にまでのびていたのです。

そのころのことです。

志佐城の殿様が、鹿狩りをされました。場所は石盛山の真ん中辺りです。ゝ

家来に連れられて、法師が殿様の前に来しました。

「どうじゃ。法師、今日の狩りの獲物がどれくらい捕れるか占ってみよ。」

と、殿様が申されました。

「よろしゅうございます。」

法師は、早速占ってみました。

「お答えします。本日の獲物は、鹿七頭半でございます。」と、答えました。

聞いていた家来は、どっと笑い声を上げました。殿様は、見る見るうちに顔色を変え、

「おのれ、わしをばかにするのか。七頭は良いが、残りの半分とは何事ぞ。体が半分の鹿でもおると申すのか。無礼者め。」

家来に笑われた殿様は、怒りに任せて、腰の刀を素早く抜くと、法師を切ってしまったのです。

そのころの武士は気が荒く、町人や百姓を切っても、何の罰も受けなかったのです。

やがて、鹿狩りが始まりました。勢いの良い家来の叫び声に追われて、野鹿が飛び出します。殿様も夢中になって、鍛えておいた弓矢の腕を試されました。三頭、四頭と獲物が増えました。殿様も家来もますます調子を出し、矢を射掛けました。

ついに獲物は七頭になりました。

その時山の方から、また一頭の鹿が追い出されて来ました。

「それつ、逃がすな。」殿様の大きな強い声が響きました。

「うわーっ。」

「おー。」

山を揺るがすような家来たちの掛け声、みんな弓を構えて、一生懸命、鹿を追いつめました。

とうとうその鹿も、何本かの矢が当たって仕留められました。

しかし、残念なことに、その鹿が仕留められたのは、隣の佐賀の国の殿様の土地だったのです。佐賀との国境の見張り役が、ちゃんと見ていました。仕留められたのは志佐の殿様でも、鹿が倒れた場所は佐賀の土地。いろいろな話し合い、獲物を半分ずつ分けることになりました。

結果は、獲物七頭半。

（次ページへ）



■あなたの力作を募集！

—民話の感想画募集—

この民話を読んで感じた情景をイラストにして、必要事項を記入の上、左記まで持参、郵送またはメールにて送付してください。応募いただいたイラストは審査をし、上位のものを次の市報で紹介いたします。

【応募資格】住所、年齢、性別など何も問いません。どなたでも応募できます。

【イラストの規格】はがきまたはA4サイズ以内の白紙に絵の具やクレパスなどで書いたカラーのもの（色鉛筆の場合は濃く塗ってください）。

【必要事項】住所、氏名（ふりがな）、電話番号、年齢、職業（学校名）

※掲載する場合、ペンネームを希望する人は、ペンネームもご記入ください。

※はがきで応募される人は、必要事項を表の下部に記載してください。なお、いただいた個人情報（民話コーナー以外には使用しません）。

【応募締切】9月13日（月）必着

【応募・問合せ先】

〒805-0145 080

松浦市志佐町里免365番地

松浦市まちづくり推進課

秘書広報係

☎0956-72-1111

メール＝

hoyo@city.matsura.lg.jp

※福島支所、鷹島支所、その他の各支所でも受け付けています。

法師の占いは、見事に当たったのです。でも、みんなは、そんな事は気にもとめず、城に戻ると、仕留めた鹿でお祝いの酒盛りが始められました。殿様や家来たちは、飲んだり騒いだり、大賑わいでした。ところが、そんなことがあつて間もなく、殿様の周りでは、何とも不思議なことが起こり始めたのです。殿様が海へ出られると舟の隅の方に、山へ行かれると木立ちの陰に、血にまみれた、あの法師が姿を現し、「じーっと」殿様を見つめているのです。

最初は、豪傑の殿様のこと、あまり気にせぬようにしておられたのですが、次第に気味が悪くなりました。また、罪もない法師を切ったことも、少し後悔されたのでしょうか。ある日、年寄りの家来を呼び、「どうしたものか、このごろでは、わしの寢床にまであの法師が出てきよる。それも血まみれの姿でな。夜もゆつくりできぬ。何とかならぬか。」と、相談されました。

年寄りの家来は答えました。「お切りになった、法師の墓を立てておやりなさいませ。」

「どんな風に。」

「聞くところによりますと、その法師は平戸の者とか。息を引き取る少し前に、『私の骨を、平戸のお城の太鼓の音が聞こえるところに埋めてくれ。』と言いました。このお城の西の方に、栢ノ木という高い山があります。あの山のてっぺんからは平戸がよく見えます。太鼓の音までは聞こえませぬが、そこに骨を埋めてやり、墓を立てておやりなさいませ。」

「分かった。すべてお前に任せるので、良いように頼むぞ。」

それで、石盛の真ん中に埋められていた哀れな法師の骨は、年寄りの家来たちの手で掘り出され、栢ノ木のとてつぺんに、丁寧に埋められました。小さな墓も立てられました。それから、殿様の周りには何事も起こらず、志佐のお城も長く栄えたということです。

今でも栢ノ木のとてつぺんに、そのお墓はあるそうです。それは、時取様と呼ばれて近くの人たちがお祭りをしておられます。(志佐町栢ノ木)

松浦の民話イラスト

読者の皆さんから寄せられたイラストの審査結果を以下の通りお知らせします。

先月の民話「上人原」のイラストに、2通の応募がありました。ご応募ありがとうございました。



【最優秀賞】

井上朋子さん(東京都八王子市(星鹿町出身)、52)
「平成14年に作成された紙芝居の中の1枚。母親の池野敏子さんは、ボランティア活動として依頼を受けた施設や保育園などでこの紙芝居をしたそうです。雨が降った時の村人たちの喜びがよく伝わってくる作品です」(か)



【優秀賞】

学童保育スマイルキッズ志佐児童クラブ
松本敬之くん(志佐・高野団地、9)

「村人が上人様の埋められた穴の周りに集まって、中でお経を唱え続ける上人様を心配しているようですね」(か)